



Tokyo Gakugei University Repository

東京学芸大学リポジトリ

<http://ir.u-gakugei.ac.jp/>

Title	中国茶文化における「煎茶」の語と伝統の形成(fulltext)
Author(s)	高橋,忠彦
Citation	東京学芸大学紀要. 人文社会科学系. 1, 65: 67-81
Issue Date	2014-01-31
URL	http://hdl.handle.net/2309/134532
Publisher	東京学芸大学学術情報委員会
Rights	

中国茶文化における「煎茶」の語と伝統の形成

高橋 忠彦
(中国古典学)

要 旨

唐の八世紀に至り、喫茶文化が急速に普及し、全国に流行し、その呼称として、新しく「煎茶」の語が登場した。煎茶法を洗練させた陸羽は「煮茶」の語を好んだものの、「煎茶」の方が定着し、後世の喫茶文化で重要な位置を占めた。本論は、この現象とその原因を、「煎」「煮」などの漢字の語義を分析ながら検討したものである。

キーワード：中国喫茶文化史、煎茶、煮茶、唐代の茶文化、陸羽、白居易

一 問題の所在

中国の喫茶文化は、製茶法と喫茶法の双方が有機的に変化し、一種の発展を遂げながら、時代ごとに大幅な変化を示してきた。もとより茶文化は物質を基盤としたものであるが、特に中国においては、文人文化の一要素を構成してきたという重要な側面を持つ。したがって、文献で使用される、茶文化を記述する「術語」が、どのように形成され、発展変化してきたかということも、中国の伝統文化の研究にとっては、重要な問題となる。^{注1)}

そのような言葉の問題として説明すべきことは多々あるが、ここで問題にしたいのは、「煎茶」という語が、唐から明にかけて、いかに発生し、定着し、変化し、ついには「伝統的な喫茶」そのものを言い表す語となったか、ということである。これは、喫茶という、古代の伝統には存在しない、新興の文化が、いかにして文人生活を代表するものにまで成長したかを考える手がかりとなる。

二 「煮茶」と「煎茶」の位相

a 中国喫茶文化における「煮る茶」の登場

中国での茶の使用は古代より存在したかと思われるが、それを飲用に使用するという事実は、文献的には前漢以降、断片的に登場する。王褒の「僮約」に「烹茶具尽(茶を煮て具尽す)」^{注2)}という言葉が見られるのは、道具を使って茶を調理することを述べた最古の記事である。

ところで、唐以前の喫茶資料の大半は、陸羽(733~804)が『茶経』七之事に^{注3)}まとめている。これは、現代でも参考にする価値のある資料であるが、それなりの編纂意図と資料的問題をはらんでいるため、テキストとして問題のある部分も見られる。その七之事においては、茶を加工飲用することについては、「煮」「煎」のみで、「烹」は見られない。「烹」「煮」「煎」の語義の差については後に詳述するが、煮るという意味を大幅に共有した同義語の類ということは可能である。

三国から南北朝にかけては、たしかに喫茶の記事が多く、宴席で飲用され、市場で販売され、寺院で客に出され、家庭で飲まれるなど、喫茶の場面も多様である。しかしながら、具体的にどのように茶飲料を作成しているかは判然としない。唯一、七之事に引く『広雅』に「荆巴間採葉作餅、葉老者餅成以米膏出之。欲煮茗飲、先炙令赤色、搗未置瓷器中、以湯澆覆之、用葱薑橘子芼之（荆巴の間葉を採りて餅と作し、葉の老いたる者は餅成りて米膏を以てこれを出す。茗飲を煮んと欲すれば、先ず炙りて赤色ならしめ、末に搗きて瓷器の中に置き、湯を以てこれに澆覆し、葱薑橘子を用いてこれに芼す）」とあり、湖北・四川間の喫茶習慣として、炙って粉にした固形茶に湯をかけ、葱、生薑、橘を具として混ぜるという。これは一見後世の泡茶のように、湯をかけて出すタイプの喫茶法に見えるが、「欲煮茗飲」という表現は、実際には煮る過程をとまなうことを示している。

しかしながら、この記事以外には、唐以前の資料に、「茶を煮る」という意味を著す「煎茶」「煮茶」のような表現はあまり見えない。「七之事」に引く『桐君録』に「巴東別有真茗茶、煎飲令人不眠。俗中多煮檀葉并大早李作茶（巴東に別に真の茗茶有り、煎飲すれば人をして眠らざらしむ。俗中に多く檀葉並びに大早李を煮て茶と作す）」とあるのは、「真の茗茶」は「煎飲」し、檀や大早李は「煮」て、いずれも薬用の飲料にするというのである。この時期には、調理や薬用の茶飲料は存在しても、純粹な茶は未発達であった。調理や薬用の茶が、「煎」や「煮」と表現されることがあったにしても、それは実際に即した記述であつて、特に茶と限定的に結びついてはいるわけではない。

b 唐詩における「煮茶」「煎茶」「煮茗」「煎茗」

唐代以降、「煮茶」と「煎茶」、また「茶」の同義語の「茗」を用いた「煮茗」と「煎茗」という表現が使われるようになった。これらの言い方は、唐代一般の言語として、その意味内容に、共時的な差異はあまり存在しないといつてよい。しかしながら、そこに何らかのニュアンスの差や、位相差が存在するか否かについては、慎重に考えねばならない。

その問題を考えるために、まず『全唐詩』を資料として、詩における使用状

況を調査する。表1は『全唐詩』において、「茶」もしくは「茗」が用いられている部分（原則として聯）で「煮」が動詞として使用されている例を全て挙げたものであり、表2は、同じく「煎」が使用されている例を全て挙げたものである。これによれば、「煮茶」は27例、「煎茶」は34例、「煮茗」は17例、「煎茗」は10例である。数の差はあるものの、いずれも十分な使用数が認められる。これら四種の表現につき、詩の内容から意味の差を帰納するのはきわめて困難である。表現されている喫茶の場面、たとえば住居、寺院、山中などを考慮しても、その用法に、差は認められない。

もちろん、「煎茶」が「平平」、「煮茶」が「仄平」、「煎茗」が「仄仄」とあるという事実は考慮しなければならないが、それは、「茶を煮る」という同じ意味を表す場合でも、平仄の都合で四種の表現を使い分けたこともありうることを示唆するだけであり、四者の意味の体系には関わらないことである。

ところで、これら四種の表現が、いつ頃から詩に用いられてきたかを確認しなければならぬ。そもそも唐以前に茶を詩に詠むことはほとんどなく、唐詩に茶が登場するのは、古詩の流れを引くというよりは、唐になって新たに喫茶の習慣が流行して以降、詩に詠まれたということであり、その意味では、「茶」は一種の唐代の流行語・新語である。

表1によれば、「煮茶」は、戴叔倫（732～789）の「春日訪山人」に見えるのが古く、「煮茗」は、韋応物（736～791頃）の「澄秀上座院」や岑参（715～770）の「聞崔十二侍御灌口夜宿報恩寺」に見えるのが古い。いずれも八世紀半ばから使われ出していると見てよい。表2によれば、「煎茶」は、張籍（766頃～830頃）の「送陸師」に見える。「煎茗」の形はとらないが、杜甫（712～770）の「迴糧」にはすでに「強飯專添滑、端居茗統煎（強飯して專滑を添え、端居して茗煎るを統く）」の句が見える。「煎茗」そのものは、姚合（816年の進士）の詩「題金州西園」から見える。

「茶」や「茗」の字が唐詩に詠まれることも、実は古くなく、蔡希寂（開元年間（713～741）の進士）の「登福先寺上方然公禪室（然公は湛然、天宝年間（742～756）に洛陽の大福先寺に居た僧侶）」に「茶果」の語が見え、王維（699頃～761）の詩「酬黎居士浙川作」（753頃の作）に「茶白」、「酬嚴少尹徐舍人見過

表1 『全唐詩』の茶詩に見える「煮」

番号	巻数	題名	本文	作者	備考
1	273	春日訪山人	遠訪山中客，分泉設煮茶。	戴叔倫	煮茶
2	279	七泉寺上方	將火尋遠泉，煮茶傍寒松。	王建	煮茶
3	440	清明日送韋侍御貶虔州	留錫和冷粥，出火煮新茶。	白居易	
4	496	送狄兼善下第歸故山	愛花高酒戶，煮葉汗茶鑪。	姚合	
5	543	送潘咸	煮雪問茶味，當風看鷹行。	喻龜	
6	558	送人自蘇州之長沙與官	茶煮朝宗水，船停調角州。	薛能	
7	573	郊居即事	葉書傳野意，簞溜煮胡茶。	賈島	
8	671	遊南明山	香分宿火薰，茶汲清泉煮。	唐彥謙	
9	691	懷盧嶽書齋	煮茶窓底水，採葉屋頭山。	杜荀鶴	煮茶
10	692	題德玄上人院	罷定磬敲松罅月，解眠茶煮石根泉。	杜荀鶴	
11	692	贈元上人	煮茶童子閑勝我，猶得依時把磬敲。	杜荀鶴	煮茶
12	692	宿東林寺題願公院	簞底水涵抄律燭，窓間風引煮茶煙。	杜荀鶴	煮茶
13	722	和知己赴任華州	樹谷期招隱，吟詩煮栢茶。	李洞	
14	723	贈曹郎中崇賢所居	藥杵聲中擲殘夢，茶鑪影裏煮孤燈。	李洞	
15	744	林居喜崔三博遠至	野石靜排為坐榻，溪茶深煮當飛甌。	伍喬	
16	749	宿青溪米処士幽居	靜慮同搜句，清神旋煮茶。	李中	煮茶
17	750	冬日書懷寄惟真大師	煮茶燒栗興，早晚復圍爐。	李中	煮茶
18	752	和蕭郎中小雪日作	征西府裏日西斜，獨試新爐自煮茶。	徐鉉	煮茶
19	795	句	茶香解睡磨齋煮，山色牽懷著屐登。	下震	
20	824	夜直	燈明宮樹色，茶煮禁泉香。	子蘭	
21	825	雪十二韻	煮茶融破練，磨墨染成蠶。	可止	煮茶
22	827	冬末病中作二首 二	教洗煮茶鑪，雪团打鄰壁。	貫休	煮茶
23	827	上馮使君五首 四	扣舷得新詩，茶煮桃花水。	貫休	
24	831	寄懷楚和尚二首 一	鉄盂湯雪早，石炭煮茶遲。	貫休	煮茶
25	836	題蘭江言上人院二首 二	青雲名士時相訪，茶煮西峰瀑布水。	貫休	
26	846	過陸鴻漸舊居	種竹岸香連菌萐，煮茶泉影落蟾蜍。	齊己	煮茶
27	847	与節供奉大德遊京口寺留題	煮茶嘗摘興何極，直至殘陽未欲迴。	齊己	煮茶
28	7	惜花吟	鶯歌蝶舞韶光長，紅爐煮茗松花香。	鮑氏君微	煮茗
29	192	澄秀上座院	林下器未收，何人適煮茗。	韋處物	煮茗
30	198	聞崔十二侍御灌口夜宿報恩寺	然燈松林靜，煮茗柴門香。	岑參	煮茗
31	463	七老會詩	山茗煮時秋霧碧，玉杯斟處彩霞鮮。	劉真	
32	497	寄元緒上人	研露題詩潔，消水煮茗香。	姚合	煮茗
33	543	龍翔寺居喜胡權見訪因宿	林棲無異歎，煮茗就花欄。	喻龜	煮茗
34	572	過雍秀才居	就涼安坐石，煮茗汲鄰泉。	賈島	煮茗
35	726	寄富洋院禪者	嘗上茗芽因客煮，海南沈屑為齋燒。	鄭良士	
36	747	贈上都先業大師	有時乘興尋師去，煮茗同吟到日西。	李中	煮茗
37	748	贈胸山楊宰	得詩書落葉，煮茗汲寒池。	李中	煮茗
38	748	獻中書張舍人	煮茗山房冷，垂綸野艇輕。	李中	煮茗
39	748	書郭判官幽齋壁	傾壺待客花開後，煮茗留僧月上初。	李中	煮茗
40	748	夏日書依上人壁	最憐煮茗相留處，疎竹當軒一榻風。	李中	煮茗
41	758	夏日登瀑頂寺因寄諸知己	杖藜青石路，煮茗白雲樵。	孟貫	煮茗
42	830	題師頴和尚院	煮茗然楓檣，泥牆札祖碑。	貫休	煮茗
43	831	上馮使君山水障子	柴棚坐逸士，露茗煮紅泉。	貫休	
44	842	聞落葉	煮茗燒乾脆，行苔踏爛紅。	齊己	煮茗

不遇」に「茶椀」、「河南嚴尹弟見宿弊廬訪別人賦十韻」に「茶香」の語が使われている。王維の場合は、単に茶が詠われているだけでなく、喫茶の流行がすでに見られるというべきであろう。「茗」も、王維の「贈吳官」、孟浩然の「清明即事」、李白の「答族姪僧中孚贈玉泉仙人掌茶」などから使用され、いずれも開元・天宝の作である。つまり初唐期には「茶」も「茗」も、とりたてて詩に使うにふさわしい言葉ではなかったということである。

c 唐代における喫茶の普及とその呼称

南北朝時代には喫茶は南朝で普及していたものの、北朝では南方の文化として、むしろ軽蔑の対象とされていたことが、『洛陽伽藍記』の記事からうかがえる^(注)。南北朝文化を統一した唐代になって、喫茶は全国に普及するが、その時期や経緯については、封演(756年の進士)の『封氏聞見記』の「南人好飲之、北人初不多飲。開元中、泰山靈岩寺有降魔禪師。大興禪教。学禪務於不寐、又不夕食、皆許其飲茶。人自懷挾、到处煮飲。從此転相倣効、遂成風俗。自鄒齊滄棣、漸至京邑。城市多開店舖、煎茶売之。不問道俗、投錢取飲。其茶自江淮而來。舟車相繼、所在山積、色類甚多。楚人陸鴻漸為茶論、説茶之功効并煎茶炙茶之法。造茶具二十四事、以都統籠貯之。遠近敬慕、好事者家藏一副(南人好みてこれを飲み、北人は初め多くは飲まず。開元中に、泰山の靈岩寺に降魔禪師有り。大いに禪教を興す。禪を学ぶには寐ねざるに務め、又た夕食せず、皆其の茶を飲むを許す。人自ら懷挾し、到る処に煮飲す。此より転じて相倣効し、遂に風俗と成る。鄒齊滄棣より、漸く京邑に至る。城市には多く店舖を開き、茶を煎てこれを売る。道俗を問わず、錢を投じて取りて飲む。其の茶は江淮より来る。舟

表2 『全唐詩』の茶詩に見える「煎」

番号	巻数	題名	本文	作者	備考
1	384	夏日閑居	藥看辰日合，茶過卯時煎。	張籍	
2	386	送陸師	九星台下煎茶別，五老峰頭覓寺居。	張籍	煎茶
3	387	蕭宅三子贈答詩二十首 客謝竹	君若隨我行，必有煎茶厄。	盧全	煎茶
4	431	郡齋暇日尋常州陳郎中使君早春晚坐水西館書事詩	徐傾下藥酒，稍熟煎茶火。	白居易	煎茶
5	437	蕭員外寄新蜀茶	蜀茶寄到但驚新，渭水煎來始覺珍。	白居易	
6	442	新昌新居書事四十韻因寄元郎中張博士	蠻榼來方瀉，蒙茶到始煎。	白居易	
7	443	山泉煎茶有懷	無由持一盃，寄與愛茶人。	白居易	煎茶 (題)
8	456	池上逐涼二首 二	襪遣禿頭奴子攪，茶教纖手侍兒煎。	白居易	
9	494	春霽	煎茶水裏花千片，候客亭中酒一樽。	施肩吾	煎茶
10	496	送別友人	摘花浸酒春愁盡，燒竹煎茶夜臥遲。	姚合	煎茶
11	501	和元八郎中秋居	酒用林花釀，茶將野水煎。	姚合	
12	501	尋僧不遇	花落煎茶水，松生醒酒風。	姚合	煎茶
13	540	即目	小鼎煎茶面曲池，白鬚道士竹間棋。	李商隱	煎茶
14	560	寄題巨源禪師	還當掃樓影，天晚自煎茶。	薛能	煎茶
15	592	題山居	掃葉煎茶摘葉書，心閑無夢夜窓虛。	曹鄴	煎茶
16	612	臨頓為吳中偏勝之地陸魯望居之不出郭曠若郊墅 余每相訪欵然惜去因成五言十首奉題屋壁 二	壓酒移谿石，煎茶拾野巢。	皮日休	煎茶
17	645	雪十二韻	童癡為獸捏，僧愛用茶煎。	李咸用	
18	692	題衡陽隱士山居	松醪臘醞安神酒，布水宵煎覓句茶。	杜荀鶴	
19	702	夏日題老將林亭	井放轆轤閑侵酒，籠開鸚鵡報煎茶。	張蠙	煎茶
20	706	壺公山	桃易炎涼熟，茶推醉醒煎。	黃滔	
21	716	山上寒夜呈進士許棠	說易分高燭，煎茶取折冰。	曹松	煎茶
22	716	山中言事	雲濕煎茶火，冰封汲井繩。	曹松	煎茶
23	717	宿溪僧院	煎茶留靜者，靠月坐蒼山。	曹松	煎茶
24	719	小兒詩	酒殢丹砂暖，茶催小玉煎。	路德延	
25	721	宿長安蘇雍主簿序	井鎖煎茶水，斤闕擣藥塵。	李洞	煎茶
26	723	寄淮海惠上人	他日願師容一榻，煎茶掃地學忘機。	李洞	煎茶
27	747	贈謙明上人	新試茶經煎有興，旧嬰詩病捨終難。	李中	
28	755	和陳洗馬山莊新泉	何日煎茶醞香酒，沙邊同聽暝猿吟。	徐鉉	煎茶
29	757	南山池	時沽村酒臨軒酌，擬摘新茶靠石煎。	梁藻	
30	758	贈棲隱洞潭先生	石泉春釀酒，松火夜煎茶。	孟貫	煎茶
31	759	煎茶	蜀茶倩箇雲僧碾，自拾枯松三四枝。	成彥雄	煎茶 (題)
32	798	宮詞 六十五	近被宮中知了事，每來隨駕使煎茶。	花蕊夫人徐氏	煎茶
33	804	訪趙鍊師不遇	暖爐留煮藥，鄰院為煎茶。	魚玄機	煎茶
34	831	和韋相公見示閑臥	餅憶葦羹美，茶思岳瀑煎。	貫休	
35	858	通道	要果逡巡種，思茶逐旋煎。	呂巖	
36	884	新雪	閑吟只愛煎茶澹，幹破平光向近軒。	薛能	煎茶
37	233	廻禪	強飯葷添滑，端居茗統煎。	杜甫	
38	335	涼風亭睡覺	飽食緩行新睡覺，一甌新茗侍兒煎。	裴度	
39	439	春末夏初閑遊江郭二首 一	嫩刺青菱角，濃煎白茗芽。	白居易	
40	451	晚起	融雪煎香茗，調酥煮乳糜。	白居易	
41	499	題金州西園九首 菱徑	愛此不能行，折薪坐煎茗。	姚合	煎茗
42	506	方山寺松下泉	野客偷煎茗，山僧借淨床。	章孝標	煎茗 (重複)
43	685	和韓致光侍郎無題三首十四韻 三	茗煎雲沫聚，藥種玉苗勻。	吳融	
44	722	錦城秋寄懷弘播上人	分泉煎月色，憶就茗林居。	李洞	
45	749	晉陵泉夏日作	依經煎綠茗，入竹就清風。	李中	
46	850	題慧山泉	野客偷煎茗，山僧借淨牀。	若水	煎茗 (重複)

車相い継ぎ、所在に山積し、色額甚だ多し。楚人陸鴻漸茶論を為し、茶の功效並びに煎茶炙茶の法を説く。茶具二十四事を造り、都統籠を以てこれを貯う。遠近敬慕し、好事者家ごとに一副を蔵す」という記事が引かれることが多い。

先に論じた、唐の詩において、「茶」や「煎茶」などの言葉が八世紀半ばにはじめて登場するということも、『封氏聞見記』の、喫茶が開元年間に普及したといわれていることと暗合するのである。

封演の記事を信用すれば、開元年間に山東の寺院で行われていた喫茶法が民間に普及し、両都で茶館が繁栄し、それは当時の言葉で「煎茶」と表現された、陸羽は「茶論」(普通に通えれば『茶経』のこと)を著し、「煎茶・炙茶の法」を説いた(要するに洗練させ、かつ宣伝した)、陸羽の考案した茶器セットも流行した、ということである。これも、『茶経』で「炙茶」を重視していること、二十四点セットの茶器を記述していること、などごとごとく一致するが、それは封演の時代に『茶経』が普及していたことを意味するだけかもしれない。ここで、もっとも考えねばならないのは、陸羽の喫茶法が、それ以前の喫茶法との程度異なっていたか、また、陸羽の喫茶法とそれ以前に流行していたという喫茶法は、実際に「煎茶」と呼ばれたか否かということである。『全唐詩』から確認できたように、開元の頃から、「煎茶」の語が使用されてい

たことは大いにありうる。ただし、それは陸羽流の茶を限定的に呼んだものではなさそうだし、陸羽の『茶経』は、「煎茶」と自称していない。そう呼ばれていたとしたら、封演の頃になって、陸羽流の喫茶が普及しており、「煎茶」の呼び方も普及していたということなのだろう。

ここで言及されている陸羽の「煎茶・炙茶の法」とはいかなるものであったか、それは『茶経』の記事を体系的に読み解くことよって理解できる。その要点を述べれば、一、餅茶（茶葉を平たく固めて乾燥させたもの）を一旦炙って香りをつける、二、喫茶の直前に、餅茶を割り碎き、やげんで粉末にしておく、三、炉にかけた鍔（平たい鍋）に一升（600cc）の水を入れる、四、湯が沸き始めて、一沸（鍋の底に泡が生じる状態）の時に湯に塩を入れる、五、湯の一部を熟盃（湯冷まし）に移す、六、二沸（泡が連なって生じる状態）の時に、湯の中心部に茶の粉末を入れる、七、三沸（沸騰）となったら、熟盃から冷めた湯を戻し、鍔を炉から下ろして沸騰を止める、八、湯の表面に華（泡のようなもの）が生じるので、湯と華を合わせて碗に汲み出し、客にふるまう、というものと考えられる。

さらに『茶経』の記事によれば、一度煮た茶は、三回（三碗）汲み出し、それぞれ五人の客に回しのみをさせる、客が七人の時は、五回（五碗）まで汲み出す、六碗以上は味が悪いので飲むではいけない、などの規定がある。このように一見煩雑な規定があるのは、「乗熱連飲（熱きに乗じて連飲す）」（『茶経』五之煮）、すなわち茶が熱く、さめて味が落ちないうちに、いそいで客に公平に茶を飲ませるといふ精神による。そのために、碗（『茶経』では正体といふべき古字の「盃」を用いる）は底が浅いものを用いる。茶の色が映えるように、越窯産の青磁を用いるべきとの指示も『茶経』四之器に記されている。

陸羽は自らの喫茶法を一貫して「煮」という動詞で記述しており、「五之煮」という章題をつけている。対して陸羽の親友とされ、喫茶に詳しい釈皎然は「烹茗」という表現を好んでいるようであり、その「答裴集陽伯明二賢各垂贈二十韻今以一章用酬兩作」には「清宵集我寺、烹茗開禪牖（清宵に我が寺に集まり、茗を煮て禪牖を開く）」、「陪盧判官水堂夜宴」には「愛君高野意、烹茗釣淪漣（君が野意を高くし、茗を煮て淪漣に釣るを愛す）」とある。湖州の喫茶文化が「煮茶」を好んで使用していたということでもなさそうである。

ちなみに、『全唐文』では、「煎茶」については三例（うち一例は張又新の著す「煎茶水記」の題名）見え、顔真卿（709～785）の「浪迹先生玄真子張志和碑銘」に引く道士張志和（730頃～810頃）の語に「漁僮使捧釣收綸、蘆中鼓柁、樵使蘇蘭新桂、竹裏煎茶（漁僮には釣を捧げ綸を取め、蘆中にて柁を鼓せしむ、樵青には蘭を蘇き桂を薪にし、竹裏にて茶を煎しむ）」とあり、道士が召使いに命じる仕事のひとつとして「煎茶」と述べている。なお、顔真卿と張志和は、湖州で陸羽と交遊のあった文人グループに属す。^註「煎茗」は『全唐文』に見えない。

「煮茶」は『全唐文』に二例（うち一例は「煎茶水記」に引く陸羽の著述という「煮茶記」の題名）にとどまり、符載（元和中に卒した人物）の「襄陽張端公西園記」に、山の庭園で文人が集うさまを「煮茶摘果、動至酣樂（茶を煮て果を摘み、動もすれば酣樂に至る）」と述べている。「煮茗」も一例、李觀が大曆十三年以後に記した「道士劉宏山院壁記」に、「先生方据梧長嘯、煮茗留客（先生は方に梧に据りて長嘯し、茗を煮て客を留む）」とある。以上、『全唐文』における「煎茶」等の用例は少ないものの、隱者（道士）が茶を煮る行為を、さまざまに表現していることがわかるし、八世紀半ば以降に使用されていることも確認できる。

唐代において、喫茶のことを文章で述べる例は、詩に比べて少ない。茶は、新興の存在でありながら、中唐以降は詩語の一部を構成し、文人文化に参入しつつあったのである。

d 「煎茶」の一般化

『全唐詩』だけからは、「煎茶」が「煮茶」より優勢とはいえないが、唐代の状況を全般的に考えると、茶を煮るという行為は、「煎茶」と呼ばれることが多かったと思われる。以下、その根拠を列挙する。

一、『太平広記』に引かれる唐の小説群では、一貫して「煎茶」が使用されており、「煮茶」は使用されていない。巻67「妙女」（『通幽記』に出ず）に「即掃室添香、煎茶待之（即ち室を掃き香を添え、茶を煎てこれ待

つ)」、卷 67「呉清妻」(「逸史」に出ず)に「華山有同行伴五人、煎茶湯相待(華山に同行の伴五人有り、茶湯を煎て相い待つ)」、卷 201「陸鴻漸」(「伝載」に出ず)に「鴻漸性嗜茶、始創煎茶法(鴻漸は性茶を嗜み、始めて煎茶の法を創る)」、卷 251「鄭光業」(「摭言」に出ず)に「既蒙取水、又使煎茶(既に水を取るを蒙り、又茶を煎しむ)」、卷 275「上清」(「常侍旨言」に出ず)に「以善応対、能煎茶、数得在帝左右(善く応対し、能く茶を煎るを以て、数は帝の左右に在るを得たり)」、卷 385「崔紹」(「河東記」に出ず)に「兼通寒暄、問第行、延升階与坐、命煎茶(兼ねて寒暄を通じ、第行を問ひ、延きて階に升らせ与に坐し、茶を煎じるを命ず)」とある。陸羽の記事を別とすれば、全てが客をもてなすために茶を用意するという文脈である。「煎茶」が召使いの技術の一つとされていることもわかる。一方で、『太平広記』卷 343「寶玉」(『続玄怪録』に出ず)に「銀炉煮茗方熟(銀炉に茗を煮て方に熟す)」とあるのは、炉に乗せた鍋で茶を煮ている状況そのものを描写する表現である。『太平広記』に「煎茗」「煮茶」は見られない。

二、敦煌変文の『妙法蓮華経講經文』にも、「送來人客煎茶待、教化師僧把捧推(送り来る人客は茶を煎て待ち、教化の師僧は把りて捧推す)の語が見える。これも人をもてなす行為としての「煎茶」であり、一と軌を一にする。

三、陸羽が御史大夫李季卿のために茶を煮、かえって侮辱されて「毀茶論」を著したという有名な伝承は、『封氏聞見記』などに見えるが、そこでは陸羽が「煎茶博士」と呼ばれたという話になっている。

四、唐末に張又新が茶に使用する水についての専著たる『煎茶水記』を表した。中で陸羽自身が水論を記した書物は「煮茶記」と題されているにもかかわらず、書名は「煎茶水記」である。ただし、書名自体は後世に改められた可能性もある。^{註 10)}

五、『全唐詩』卷 702 に載せる張蠙の「夏日題老將林亭」に「井放轆轤閑侵酒、籠開鸚鵡報煎茶(井は放たれて轆轤は閑かに酒を侵し、籠は開かれて鸚鵡茶を煎ると報ず)」とある。これは後に「鸚鵡叫煎茶、与茶元不識(鸚鵡煎茶と叫ぶも、茶と元と識らず)」という形で、圓悟克勤が編んだ『拈

八方珠玉集』に、正覚宗頤の語として見え、相当に流布することとなる。鸚鵡は意味もわからずに、人の言葉を模倣して「煎茶」と叫ぶ(もしくは命じる)ということであろう。鸚鵡がこのような言葉を叫ぶとされたのは、主人が客をもてなすために、召使いに命ずる言葉として「煎茶」というのが一般的であった傍証となろう。

六、すでに挙げた『封氏聞見記』は、開元年間に流行を始めた喫茶を「煎茶」と呼んでいる。

e 白居易の茶

唐代に「煎茶」の語を優勢にした人物として、白居易を挙げることができる。白居易は唐代最大数の茶詩を著しており、^{註 11)} 芸術上の評価は別としても、よく知られた詩人であるため、唐とそれ以降の文人への影響は大である。表一に示すように、ここでは茶を煮ることを常に「煎」と表現している。「郡齋暇日辱常州陳郎中使君早春晚坐水西館書事詩十六韻見寄亦以十六韻酬之」に「徐傾下葉酒、稍煎煎茶火(徐ろに傾く葉を下すの酒、稍ば煎す茶を煎るの火)」、「蕭員外寄新蜀茶」に「蜀茶寄到但驚新、渭水煎來始覺珍(蜀茶寄せ到りて但だ新しきに驚き、渭水煎し來りて始めて珍なるを覺ゆ)」、「春末夏初閑遊江郭二首 一」に「嫩剥青菱角、濃煎白茗芽(嫩にして剥く青き菱角、濃く煎る白き茗芽)」、「新昌新居書事四十韻因寄元郎中張博士」に「蜜檻來方瀉、蒙茶到始煎(蜜檻來りて方に瀉ぎ、蒙茶到りて始めて煎る)」、「晚起」に「融雪煎香茗、調酥煮乳糜(雪を融して香茗を煎、酥を調えて乳糜を煮る)」、「池上逐涼二首 二」に「權遣禿頭奴子撥、茶教纖手侍兒煎(權は禿頭の奴子をして撥せしめ、茶は纖手の侍兒をして煎しむ)」とある。「山泉煎茶有懷」と題した詩すら存在する。ちなみに、題に「煎茶」の語を用いた詩は、『全唐詩』では他に成彦雄(五代末の人)に一作あるのみである。逆に白居易が「煮」を用いた茶詩は、「清明日送韋侍御貶虔州」に「留錫和冷粥、出火煮新茶(錫を留めて冷粥に和し、火を出して新茶を煮る)」とあるのみである。ここまで「煎」が多いと、単に平仄のためとは考えられず、白居易が好んで「煎」を用いたといわざるをえない。一方で、白居易の書いた散文においては、茶(茗)が登場すること自体が少

ない上に、その意味が限定されている。まず、「三月三日謝恩賜曲江宴會狀」と「謝恩賜茶果等狀」に「茶果」の語が見え、いずれも高官に下賜されたものである。「祭中書草相公文」の「茶果之奠」は、死者をまつる供物であるし、「草堂記」で廬山の草堂の落成供養に僧侶を招いたことを述べ、「具齋施茶果以落之（齋施茶果を具して以てこれを落す）」と記すのは、布施である。これらは儀礼的な「茶果」と位置づけることができる。一方、「論行營狀」の「茶塩估價」、「白蘋洲五亭記」と「唐故魏州刺史贈礼部尚書崔公墓志銘并序」の「茶法」は、いずれも国家が専売している茶のことである。儀礼的な茶も、経済的な茶も、白居易が詩に詠んだ、個人的に愛好する茶とは無縁の存在である。唯一の例外が、同じ「草堂記」の「又有飛泉植茗、就以烹燂、好事者見可以永日（又た飛泉植茗有り、就きて以て烹燂すれば、好事者見て以て日を永うべし）」である。草堂に茶が植えられていたことについては、「香爐峰下新卜山居草堂初成偶題東壁、重題」第二首に全く同じ内容が、「長松樹下小溪頭、班鹿胎巾白布裘。菓圃泉新引得、清冷屈曲繞階流（長松樹の下小溪の頭、班鹿胎の中白布の裘。菓圃茶園は産業為り、野麋林鶴は是れ交遊たり。雲は澗戸に生じて衣裳潤い、嵐は山廚を隠して火燭幽かなり。最も愛す一泉新たに引き得、清冷として屈曲し階を繞りて流るるを）」と詠まれていて、これはまさしく隠逸生活のそえものとするための茶である。他の七例が「茶」であるのに対し、ここで「茗」が使われているのは、植物のイメージを帯びているともとれる。要するに、白居易の散文の世界では、私的な茶に言及するのは例外的なのである。

三 「煮」と「煎」の差異

a 「煮」と「煎」

「煎茶」と「煮茶」に関する問題をさらに深く考えるためには、「煎」と「煮」の字義に本質的にどのような差異が存在するかを確認しなければならぬ。両者は一種の同義語であり、例えば、茶を鍋で煮るといふようなことを意味する場合、「煎茶」と「煮茶」のいずれも可能である。

しかしながら、ここで有名な曹植の「七歩の詩」（『世説新語』文学）を見てみよう。

煮豆持作羹、漉菽以為汁。

其在釜下然、豆在釜中泣。

本是同根生、相煎何太急。

（豆を煮て持て羹と作し、菽を漉して以て汁と為す。

其は釜の下に在りて然え、豆は釜の中に在りて泣く。

本是れ根を同じくして生ずるに、相煎ること何ぞ太だ急なる。）

詩の意味は説明を要しないだろうが、ここで注目すべきは、同じ詩に「煮」と「煎」が使用されていることである。しかし、文脈から意味に違いがあることがわかる。「煮豆持作羹」の「煮」は、料理のために豆を煮て柔らかくすることである。それに対し、「相煎何太急」は、釜の中の豆が、なぜあなたは私をそんなにひどく煮詰めるのか、と訴える語である。この「煎」は、「煮」と全く同じ事柄を意味しながらも、対象に作用を与える点を強調している。「相煎」という表現は成立しても、「相煮」という表現を見いだすことができないということからも、差異が存在することが確認できる。

以上の「煎」の字義から、唐の開元以降に流行した喫茶法が「煎茶」と呼ばれた理由を推定できるであろうか。もとより断言はできないが、『封氏聞見記』の述べる流行の経緯を見ると、人々が至るところで「煎飲」したとあり、都市の茶館で出した茶である。また唐代の資料全体を通して、来客をもてなす茶との性格が強い。

これらのことから推測するに、その場で鍋で煮る即席の茶というイメージで「煎茶」と呼んだのではなからうか。「煎」は、薬学的な文脈では、「煮」より長期間煮詰めるという意味にもなるが、その意味は単純ではない。「煎」が、強火で煮詰めるといった意味にもなり得ることは、後文で論ずる。

b 「煮」の語義

表3 『斉民要術』における沸

	煮	煎	無	計
一沸	4	0	0	4
二沸	2	0	2	4
三沸	5	0	1	6
四沸	1	1	0	2
五沸	0	0	0	0
六沸	1	0	1	2
七沸	2	0	0	2
計	15	1	4	20

「煎」と「煮」の用法上の差異は、本質的には、語義の差異に由来すると思われる。まず、「煮」は、『周礼』天官・亨人に「亨人掌共鼎鑊、以給水火之齐。職外、内饗之饗亨煮、弁膳羞之物（亨人は掌鼎鑊を共し、以て水火の齐を給するを掌る。職外に、内饗の饗亨煮に、膳羞の物を弁す）」とあるように、古代から調理の一形態であり、竈で物を煮ることであった。

『説文解字』に「鬻、言也」とあり、「煮」は「鬻」の異体、「言」は「亨」の異体であるから、「煮」の古義は、祭祀の鼎で供物を煮て神に捧げるというような、重い意味であったことがうかがえる。玄応『一切経音義』卷16「烹鴈」注に引く『方言』には、「凡煮於鑊中曰烹、於鼎曰煮（凡そ鑊中に於いて煮るを烹と曰い、鼎に於いて煮るを煮と曰う）」とあり、「鼎で煮る」として、「鑊」（脚の無い鼎）で煮る「烹」との差異を示すような定義づけもある。もとより後世は、一般に広く煮ることを示すようになり、「烹」の同義語として機能するようになったものである。「者」と「火」を組み合わせた字の成り立ちについては、明確な説明はできない。

しかしながら「煮」には独特のニュアンスが付せられていくように見える。それを用例からたどってみよう。まず、『淮南子』秦族の「蘭之性為糸、然非得工女煮以熱湯而抽其統紀、則不能成糸（蘭の性は糸を為す、然れども工女を得て煮るに熱湯を以てしてその統紀を抽いずるに非ざれば、則ち糸を成すこと能わず）」が蘭を煮ることをいっているので、すでに料理から離れている。ものを煮て柔らかくするという点に力点が置かれる傾向がみられる。『論衡』道虚篇の「黄之与白、猶肉腥炙之焦、魚鮮煮之熟也（黄の白とは、猶お肉腥なるもこれを炙れば焦げ、魚鮮なるもこれを煮れば熟するがごとし）」では、「煮」と

「熟」を互文に用いている。これは、曹植の「釈疑論」の「令甘始以藥含生魚、而煮之于沸脂中。其無藥者、熟而可食。其銜藥者、遊戯終日、如在水中也（甘始をして薬を以て生魚に含ませ、これを沸脂の中に煮せしむ。その薬無き者は、熟して食うべし。その薬を銜む者は、遊戯する

こと終日、水中に在るがごとし）」と論旨が似ている。この両例では、「煮」は、水や油で煮ることによって、魚に火が通ることを強調する。『斉民要術』のよな料理書においても、豆や肉を柔らかくなるまで煮る意で用い、時には汁を取るために煮る意になる。なお、表3に示すごとく、同書では「煮」は「沸」とともに用いられることが多く、「三沸」の時間「煮」という表現が多い。これは上述した『茶経』の三沸の発想と、厳密には意味が違うが、表現としては暗合する。また、陶弘景の「本草集注序」にも「煮兩三沸」という表現がたびたび見え、「煮」が、「三沸」と結びつくことが自然であることの傍証となる。いくつか補足しよう。唐詩などに、道士の描写として、「煮石」とか「煮白石」とかいう表現が多く、例えば韋応物の「寄全椒山中道士」に「澗底束荆薪、婦来煮白石（澗底に荆薪を束ね、婦り来りて白石を煮る）」とある。これも、「本来堅いものである石を煮て柔らかくする」ということには違いない。以上の事例から考えると、「煮」という行為に重点が置かれているのは、煮られる対象によく火が通ること、柔らかくなることである。

一方で「煮」は古くから、製塩のために海水を煮詰めるという意味にも用いられる。『管子』地数の「夫楚有汝漢之金、斉有渠展之塩、燕有遼東之煮（夫れ楚には汝漢の金有り、斉には渠展の塩有り、燕には遼東の煮有り）」、塩鉄論の「冶鉄煮塩」、「煮海為塩」など、その例は多い。後述するように、「煎」には煮詰める意味が強いので、そのほうが製塩の表現に向いているように思えるが、「鍋で煮る」行為そのものを表現するには、「煮」がふさわしかったということであろう。

c 「煎」の語義

次に「煎」は、古くから、単に煮るということでなく、煮詰める意味に用いられる。これも調理用語であり、『周礼』天官・内饗に「内饗掌王及后、世子膳羞之割亨煎和之事（内饗は王及び后、世子の膳羞の割亨煎和の事を掌る）」とある。「煎和」はおそらく一語であり、鄭玄注に「煎和、齊以五味（煎和は、齊うるに五味を以てす）」とあって、孫詒讓『周礼正義』が「蓋謂煎熬而以五味調和之（蓋し煎熬して五味を以てこれを調和するを謂う）」と敷衍するのを

参考にすれば、「割亨（烹に通じる）」が、シチュー状の煮込み料理を意味するのに対し、材料を炒めたり煮詰めたりして味をつけた料理を指す。要するに、「煎」の本来の意味は、少量の油か水で炒り煮するという可能性が高い。『方言』に「煎、尽也」、「広雅」釈詁に「煎、尽也」、「煎、乾也」とあるのも、「煎」に本来「煮詰める」意味があったことの反映である。

とはいえ、「煎」の用例を検討すると、相当幅広く、派生的な用法を生み出した事がうかがえる。まず、『莊子』人間世に「山木自寇也、膏火自煎也（山木は自ら寇し、膏火は自ら煎す）」とあるのは、燈火が燃えて油が減少すること、『韓非子』備内の「今夫水之勝火亦明矣、然而釜隔間之、水煎沸竭尺其上、而炎得熾盛焚其下（今夫の水の火に勝つは亦た明かなり、然れども釜隔これをつれば、水は煎沸して尺をその上に竭き、炎は熾盛するを得てその下に焚く）」は、釜の湯が減少することをいう。これらは原義の持っていた「煮詰めて水気を減らす」の「減」が強調された例である。

ここで上に述べた「七歩の詩」の「相煎」に戻って考えると、「煎」の「煮詰める」意味に含まれる、「強い火気で熱する」意味が強調されているものと思われる。白居易「大水」の「風卷白波翻、日煎紅浪沸（風は白波を巻きて翻り、日は紅浪を煎りて沸く）」という表現にもそのような意味が認められる。

煮詰めるという意味の「煎」は、薬物関係でもさまざまに用いられた。庾肩吾が陶弘景に「答陶隱居賣朮煎啓」と「答陶隱居賣朮蒸啓」という札状を与えていることからすると、「朮」を加工した薬品に「朮煎」と「朮蒸」の二種があった。前者は薬草の朮を水気がなくなるまで煮詰めた、ペースト状か粉末状の薬品であろう。唐の『新修本草』の「詹糖樹」に「煎枝葉為香、似砂糖而黑（枝葉を煎じて香と為せば、砂糖に似て黒し）」とあるのは、ある樹木の枝葉を煮詰めて、砂糖状にするということである。

一方で、「煎」は油脂と関連させて使われる傾向がある。陶弘景の「本草集注序」に「薬有宜丸者、宜散者、宜水煮者、宜酒漬者、宜膏煎者（薬には宜しく丸とすべきもの有り、宜しく散とすべきもの有り、宜しく水に煮るべきもの有り、宜しく酒に漬けるべきもの有り、宜しく膏に煎るべきもの有り）」とあるのは、薬品を膏で炒めて加工することである。

『新修本草』の「熊」に「其腹中肪及身中膏、煎取可作薬（その腹中の肪及

び身中の膏は、煎て取りて薬と作すべし）」とあるのは、熊肉を炒って膏を取り出すことであり、意味合いは違うが、作業としては似ている。

さらに、「煎」に煮詰める意があるため、その水量が減るまで湯で薬物を煮詰め続ける、という薬学的用法も生じる。今日日本語でも使用する「煎じ薬」の「煎」である。唐宋の医書や本草書では、「煎服」と「点服」の語が使い分けられているが、これは、同一の薬物でも、そのエキスを煮出して飲む服用法と、粉末にしてそのまま飲む服用法が存在することを意味する。

ただ現実には、湯が減るまで煮詰めるという場合、「煎」と「煮」が、区別されずに使用されている文献も存在する。敦煌文書の『不知名医方第六種残卷』^{〔注12〕}「以水二大升、煎取七六合（水二大升を以て、煎て七六合を取る）」と「以水三升、煮取七合（水三升を以て、煮て七合を取る）」という二つの記事が併存している。ここでの「煎」と「煮」は全く同義である。このような現象に対する説明としては、本来「煎」と「煮」の意味が大きく重なること、数字を挙げた記述であって処方上の誤解の余地がないこと、民間の文書で厳密さを欠いたこと、などの理由が考えられる。

以上述べてきた「煮」と「煎」の差異は、次の事実から確認できる。「煮」は、意味的に近い「爛」と連語を形成し、「爛煮」「煮爛」という用例が確認されるが、「爛煎」「煎爛」という表現は存在しない。「煎」は、煮詰めるという語感を持つため、「煎熬」「煎靡」「煎灼」「相煎」「煎煎」等の連語が使われるが、「煮熬」「煮靡」「煮灼」「相煮」という表現は成立しない。ここに、「両語の差異を認めることは容易であろう。

以上のことから、陸羽が『茶経』を著す際に、「煎」でなく「煮」を選び取ったことについて、その理由を想像することができる。陸羽の喫茶法は、「三沸」の原理によって茶を適切に煮ることを重視する。陸羽の言語感覚では、「三沸」もしくは「沸」と結びつきやすいのは「煮」であって「煎」ではなかったのだろう。それに対し、「煎」は多義的であるとはいえず、「煮る方法論」を重視する陸羽にとっては、「煮詰める」であれ、「強く煮る」であれ、茶にふさわしい表現とは思えなかったであろう。もう一つの推測として、既に流布していた「煎茶」という用語に対し、陸羽が「煮茶」で独自性を主張したという可能性もある。

d 「烹」と「瀹」

ちなみに、茶の煮方を表す唐宋の語彙には、「烹茶」「烹茗」「瀹茶」「瀹茗」というものも存在する。ただ『全唐詩』の用例数でも確認できることだが、「煎」や「煮」に比べて使用頻度が少ないため、ここでは参考までに要点だけ述べる。「烹」は、『老子』六十章に「治大国若烹小鮮（大国を治むるは小鮮を烹るがごとし）」とあるように、煮て調理するという、一般的な意味である。すでに述べたように、王褒「僮約」の「烹茶器具」が、茶を煮るといふ記事の最古例であるが、その割に唐宋時期には使用例が少ない。新語の「煎茶」や「煮茶」に圧倒された形である。『全唐詩』に「烹茶」は五例、「烹茗」は四例見える（表4参照）。

次に「瀹」は、野菜等を熱湯で湯がく意であり、鳥肉、卵、繭を茹でる場合にも用いられているが、煮てそのまま料理するのでなく、茹でてから引き上げるという点に特徴がある。『儀礼』既夕礼に「菅三、其实皆瀹（菅三、その実は皆瀹す）」とあり、鄭注に「米麦皆湛之湯

表4 『全唐詩』の茶詩に見える「烹」と「瀹」

番号	巻数	題名	本文	作者	備考
1	273	南野	茶烹松火紅，酒吸荷杯綠。	戴叔倫	
2	322	伏蒙十六叔寄示喜慶感懷三十韻因献之	種杏当暑熱，烹茶含露新。	權德輿	烹茶
3	395	冰柱	不為双井水，滿甌泛泛烹春茶。	劉又	
4	544	夏夜会同人	岸幘栖禽下，烹茶玉漏中。	劉得仁	烹茶
5	747	獻中書韓舍人	烹茶留野客，展画看滄洲。	李中	烹茶
6	827	書倪氏屋壁三首 一	茶烹綠乳花暎簾，撈沙苦筍銀纖纖。	貫休	
7	832	贈靈鷲山道潤禪師院	薪拾紛紛葉，茶烹滴滴泉。	貫休	
8	835	酬周相公見贈	境陟名山烹錦水，睡忘東白洞平茶。	貫休	
9	843	寄旧居隣友	晚鼎烹茶綠，晨厨饜粟紅。	齊己	烹茶
10	849	投謁齊己	烹茶童子休相問，報道門前是衲僧。	乾康	烹茶
11	508	題黄山湯院	善烹寒食茗，能變早春園。	李敬方	
12	675	西蜀淨衆寺松溪八韻兼寄小筆崔処士	澹烹新茗爽，暖泛落花輕。	鄭谷	
13	704	送陳樵下第東歸	青山烹茗石，滄海寄家船。	黃滔	烹茗
14	748	贈胸山孫明府	閑撫素琴曹吏散，自烹新茗海僧來。	李中	
15	809	送童子下山	添瓶潤底休招月，烹茗甌中罷弄花。	金地藏	烹茗
16	816	答裴集陽伯明二賢各垂贈二十韻今以一章用酬兩作	清宵集我寺，烹茗開禪牖。	皎然	烹茗
17	817	陪盧判官水堂夜宴	愛君高野意，烹茗釣滄漣。	皎然	烹茗
1	723	和曹監春晴見寄	蘭台架列排書目，顧渚香浮瀹茗花。	李洞	瀹茗

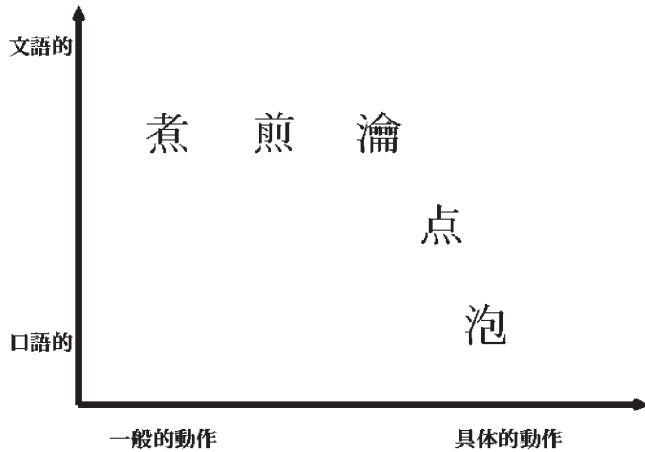


図2 茶をいれる動作を表す動詞の位相

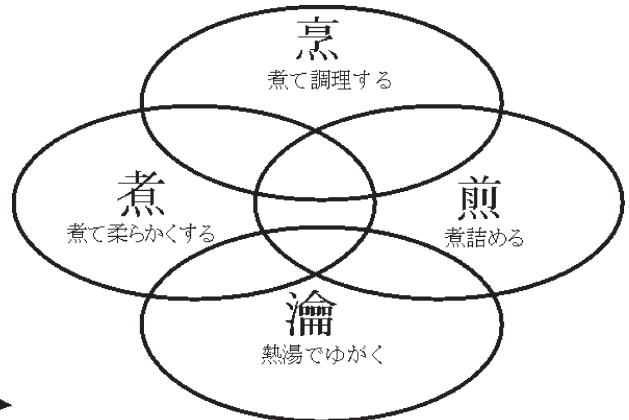


図1 煮・煎・烹・瀹の字義の体系

「米麦は皆これ湯に湛す」と説明する。派生義として、洗い清める意に用いられている例として、『莊子』知北遊に「老聃曰、汝斉戒、疏瀹而心、澡雪而精神（老聃曰く、汝は斉戒し、而の心を疏瀹し、而の精神を澡雪せよ）」とある。これは「疏瀹」の連語として、『文心雕龍』神思の「疏瀹五藏、澡雪精神（五藏を疏瀹し、精神を澡雪す）」、「月夜啜茶聯句」の顔真卿の句「流華淨肌骨、疏瀹滌心原（流華は肌骨を浄め、疏瀹して心原を滌す）」などに受け継がれる。

『全唐詩』に「瀹茶」は見えないが、「瀹茗」につながるの是一例、李洞（昭宗時の人）の「和曹監春晴見寄」に「蘭台架列排書目、顧渚香浮瀹茗花（蘭台の架列びて書目を排べ、顧渚の香り浮びて茗花を瀹す）」とある。

茶会の様子を詳述した顔真卿の句の影響があるか否かは不明だが、「瀹茗」は、『莊子』の雰囲気を持たせた雅語的な表現として、後世使用される。

結果として、茶を煮る意の「烹」と「淪」は残存し、後者の方が好んで使用されたという見通しになりつつ。南宋の陸游（1125～1210）の茶詩においては、「淪茗」は五例も確認^(注15)できる。

ここで「煮」「煎」「烹」「淪」の四語の関係をまとめると、概略は図1のようになろう。さらにこれらが、点茶法の「点」と泡茶法の「泡」と、どのような関係を示すかを表したのが、図2である。「点」や「泡」は、程度の差はあっても、より具体的な動作を示す表現であり、口語的性格を帯びる。そのため、詩の表現としては「点」は少なく、「泡」はほとんど用いられないという結果を生んだ。

四 「茶」と「茗」の位相

ここまでは、茶を表す言葉そのものについては触れてこなかったが、統計的には「茶」と「茗」の両語が圧倒的に多い。『茶経』一之源には、茶の異名として「茶」「檟」「茗」「護」「薺」が挙げられている。^(注15)しかしながら、「檟」「護」「薺」の三者が使用されることはまれであるし、その一部はそもそも茶の異名と呼んでよいかどうかも疑問がある。たとえば『全唐詩』で「檟」や「護」が茶の意味で使われることはなく、「茶薺」の連語なら三例ほど見いだせるが、それは雅語的な表現なのであろう。

ところで、「茶」と「茗」は、ほぼ同義語といえるものの、完全に用例が一致するわけではない。たとえば、「緑茗」とは言っても、「緑茶」とは言わず、「餅茶」とは言っても、「餅茗」とは言わず、「茶果」の熟語はあるが、「茗果」は無い。ここから、山に生えている緑の茶の芽をイメージする場合は「茗」、固形茶に加工した場合は「茶」である可能性が生じる。一例から断定することはできないが、上述の白居易の「草堂記」での用字もそれをうかがわせる。

もとより現実には、「茶」と「茗」の区別がされることはまれであり、字義が大幅に重なることはいうまでもない。ただ、陸羽の著述が『茶経』という名を冠したこと、また、上述したように、「煎茶」が唐代に急速に流行した語であったことなどを考えると、「茗」が六朝以来の古めの雅語、「茶」が古くからあるにせよ、唐代として普通の語であったということも考えられる。

表5 煎・煮と茶・茗の関係

	全唐詩	陸游
煎+茶	34	40
煎+茗	10	6
煮+茶	27	9
煮+茗	17	8

このような意味の差は、「煎」と「煮」の意味の差と微妙に関連しあう。それは、『全唐詩』における「煎+茶」と「煮+茶」、「煎+茗」と「煮+茗」という組み合わせに現れている。この四語の用例数を調査すると、表5のようになり（詩の題名は除く）、対象が「茶」の場合は「煎」を使用する傾向が強く、「茗」の場合は、「煮」を使用する場合が多い。「茶」に製造された茶や、飲料として抽象化された茶のイメージが強く、「茗」に茶の葉のイメージが強いことと、「煎」が茶を煮立てるイメージ、「煮」が一般的に物を煮るイメージに傾斜していることで、この現象は説明がつく。熱湯に浸す意味の「淪」が「茗」と結びつきやすいことと同様である。

五 「煎茶」の定着と茶文化の伝統の形成

以上で「煎茶」の語義については、十分議論できたとと思うが、なぜ唐代で「煎茶」が優勢になったか、その経緯と理由については、概ね次のように考えられる。

- 一、唐代以前には「煎茶」という表現はあり得ても、熟していなかったし、それが特定の喫茶法を示すことはありえなかった。茶飲料は事前に用意しておく料理（スープ）のようなものであり、特定の表現を必要としなかったためである。
- 二、陸羽以前、開元年間から喫茶が全国に普及したが、この新しい流行は、「煎茶」と呼ばれた。「その場で煮て供する茶」というような意味合いであったと推測される。
- 三、陸羽は喫茶法を改良し、それを「煎」でなく「煮」で表現した。「さつ」と沸かして飲む茶」というイメージであったと推測される。
- 四、すでに普及していた喫茶が「煎茶」と呼ばれていたため、陸羽個人がいかなる言葉で表現しようと、唐代の人から、また後世の人間からは、陸羽の茶も「煎茶」と呼ばれた。それが一般的であったからであろう。

表6 陸游の茶詩に見える「煮」と「煎」

番号	巻数	題名	本文	備考
1	2254	寄酬曾学士学宛陵先生体比得書云所寓広教僧舍有陸子泉每对之輒奉懷	公閑計有客，煎茶置風爐。	煎茶
2	2254	酬妙湛園梨兒贈妙混能棋其師璘公蓋嘗与先君遊云	山店煎茶留小語，寺橋看雨待幽期。	煎茶
3	2255	西齋雨後	香碗灰深微炷火，茶鑪聲細緩煎湯。	
4	2259	初到榮州	地爐堆獸熾石炭，瓦鼎號蜩煎秋茶。	
5	2259	自小雲頂上雲頂寺	煎茶清熾下，童子拾墮薪。	煎茶
6	2161	眉州歇舍睡起	煎茶倘已熟，一笑問童子。	煎茶
7	2161	浣花女	当戸夜織声啾啾，地爐豆豉煎土茶。	
8	2162	別後寄季長	煎茶題野店，喚船截烟津。	煎茶
9	2166	青溪道中行古松間因少留瀾茶而行	拾樵汲燭俱清絕，聊為煎茶一拋床。	煎茶
10	2166	雪中登雲泉上方	煎茶誇坐客，打竹課蠻童。	煎茶
11	2166	大雪歌	銀杯拌蜜非老事，石鼎煎茶且時啜。	煎茶
12	2168	擁爐	鳧鼎煎茶非俗物，雁燈開卷愜幽情。	煎茶
13	2169	幽事	快日明窓閑試墨，寒泉古鼎自煎茶。	煎茶
14	2171	登北榭	香浮鼻觀煎茶熟，喜動眉間煉句成。	煎茶
15	2171	書嘆	但憶喚山僧，煎茶陳餅果。	煎茶
16	2173	釣台見送客罷還舟熟睡至覺度寺	詩情森欲動，茶鼎煎正熟。	
17	2177	舟過季家山小泊	因慙濛濛渴煮茶，繫船來叩野人家。	煮茶
18	2179	題老学庵壁	喚得南村跛童子，煎茶掃地亦隨緣。	煎茶
19	2183	幽居戲贈鄰曲	直令掩關避世俗，未嘗煎茶喚鄰舍。	煎茶
20	2186	雨中熟睡至夕二首 其二	小兒忽報煎茶熟，起擁寒炉究余味。	煎茶
21	2188	雨中作三首 其一	茅屋松明照，茶鑪雪水煎。	
22	2189	久雨	弄筆排孤悶，煎茶洗睡昏。	煎茶
23	2189	南窓	小鼎煎茶熟，幽人作夢回。	煎茶
24	2190	小園新晴二首 其一	臘醃拆泥留客醉，山茶落磴喚兒煎。	
25	2190	秋思四首 其三	寒澗挹泉供試墨，墮葉篝火喚煎茶。	煎茶
26	2196	近村暮歸	僧閣煮茶同淡話，漁舟投釣卜清歛。	煮茶
27	2197	午坐戲詠	貯茶胡盧二寸黃，煎茶橄欖一甌香。	煎茶
28	2199	戲作絕句以唐人句終之二首 其二	靜對煎茶竈，閑疏洗菜泉。	煎茶
29	2199	自詠二首 其一	飯余解帶摩便腹，自取風爐煮晚茶。	
30	2203	初春雜興五首 其一	煎茶小石鼎，酌酒古銅卮。	煎茶
31	2205	閑詠二首 其一	買菊穿苔種，懷茶就井煎。	
32	2213	寒雨中夜坐	爐熟松肪如蠟爨，鼎煎茶浪起灘聲。	煎茶
33	2219	梨花三首 其一	征西幕府煎茶地，一幅辺鸞画折枝。	煎茶
34	2220	庵中紀事用前輩韻	荒山斲藥須長鑿，小竈煎茶便短杖。	煎茶
35	2221	出遊二首 其二	篝火就炊朝飯，汲泉自煮午甌茶。	
36	2223	題野人壁	市墟買酒何人識，僧閣煎茶欠客同。	煎茶
37	2223	茅舍	日長亦莫僧春困，小竈何妨自煮茶。	煮茶
38	2228	東窓四首 其四	蛮童未報煎茶熟，一卷南華枕上看。	煎茶
39	2229	初夏喜事	采茶歌裏春光老，煮繭香中夏景長。	
40	2229	初夏雜興六首 其一	把釣溪頭踴湍瀾，煎茶林下置風爐。	煎茶
41	2229	暑雨二首 其一	蛮童正報煮茶熟，忽有野僧來叩門。	煮茶
42	2230	書村店壁	裹茶來就店家煎，手解驢鞍古柳邊。	
43	2231	閑行至西山民家	客至但舉手，土釜煎秋茶。	
44	2232	初冬雜詠八首 其七	夜窓父子共煎茶，一点青燈冷結花。	煎茶
45	2232	自法雲歸	歸來何事添幽致，小竈燈前自煮茶。	煮茶
46	2234	陳讓堰市中遇吳氏老自言七十六歲与語久之及歸送予過市猶恋恋不忍去	就店煮茶古堰邊，偶逢父老便忘年。	煮茶
47	2235	夏日十二首 其八	巖前恨欠煎茶地，安得茆茨一小間。	煎茶
48	2236	秋雨	看書不覺向壁卧，煎茶欲罷推枕起。	煎茶
49	2238	病中雜詠十首 其六	茶煎小鼎初翻浪，燈映寒窓自結花。	
50	2241	致爽軒	黃塵赤日汗沾襟，竹裏煎茶喜有余。	煎茶
51	2241	石門	手摘石上茶，風爐煮甘寒。	
52	2154	送陳德邵宮教赴行在二十韻	敗席留煮茗，寒厅無雜賓。	
53	2167	夜汲井水煮茶	山童亦睡熟，汲水自煎茗。	
54	2168	秋思	委轡看山無鉄糲，拾樵煎茗有青猿。	
55	2169	閑居書事	玩易焚香消永日，聽琴煮茗送殘春。	
56	2170	冬夜与溥庵主說川食戲作	何時一飽与子同，更煎土茗浮甘菊。	
57	2170	雪中作	属国餐糧真強項，翰林煮茗自風流。	
58	2174	到家句余意味甚適戲書	石鼎颺颺閑煮茗，玉轡零落自修琴。	
59	2196	午枕	清泉洗瀾煎山茗，滿榻松風清昼眠。	
60	2210	初夏昼眠	晚窓思茗飲，自取雪芽煎。	
61	2221	秋懷十首 其五	活火閑煎茗，殘杯靜拾棋。	
62	2224	幽居即事九首 其三	枯腸不禁攪，戒婢罷煮茗。	
63	2233	幽居歲暮五首 其四	燃薪代爨燭，煮茗当云杯。	
64	2233	遊山步二首 其二	時喚行僧同煮茗，亦逢樵叟問迷途。	
65	2236	清暑	厨人具漿粉，童子煮山茗。	

五、陸羽の洗練された喫茶法を受け継ぎながらも、茶に対する考え方の大いに異なる白居易は、「煎茶」の語を用いた。なぜ白居易が「煎」を好んだかについては、二つの解釈が成り立つ。一つは、単にそちらの方が一般的であったということであり、もう一つは、「煎」の語感が、白居易の愛好する茶にふさわしかったという考え方である。想像の域を出ないが、その場合、「葉のように煮る茶」もしくは「強い火で茶をさつと煮

る」という語感を持たせたのであろうか。六、白居易や盧仝の詩に「煎」が使われたことが、後世の茶詩に影響を与えた。七、皮日休・陸龜蒙のように、陸羽を継承すると自負していた場合は、「煮茶」という題の詩を作っているが、これはこれで理解できる。

その後、「煎茶」という言葉は、中国の喫茶文化史において、重要な意味をもって使用され続ける。宋代には、一方では「点茶」「分茶」とも呼ばれる）と対比して、「煎茶」が使用される。この場合は、原則として唐代以来の伝統的な喫茶法ということである。また一方では、「煎茶」が広く「喫茶」の意味で用いられることもある。南宋の陸游（1125～1210）は百首を超す茶詩を書き残し、唐代の詩の表現を踏まえたつ、独自の茶の世界を構築している。表6には、「煎」と「煮」

表 7

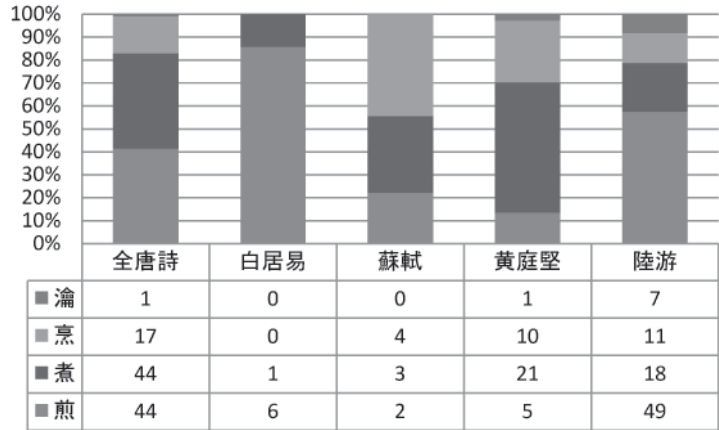
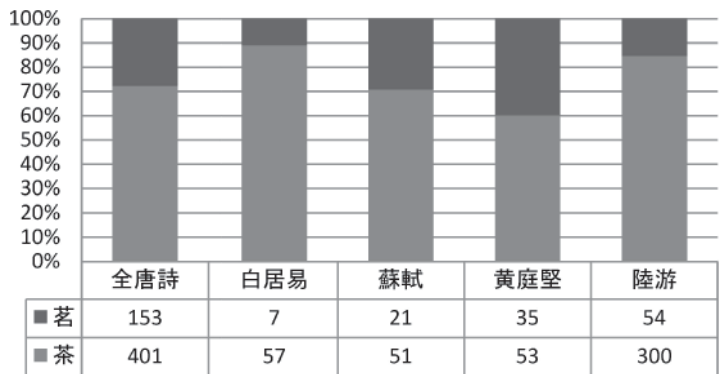


表 8



を用いた例のみを示すが、「煎」のほうが「煮」より圧倒的に多い。そこで描かれてはいる、自宅や寺院や茶店で飲む茶が、どのような手順で飲まれているかは、厳密には知り得ないが、時代や地域や茶の種類から考えると、多くは点茶法であったと思われる。^{注1)}つまり、「点茶」であるにもかかわらず、「煎茶」の語を用いているということである。

後に明代になると、陸游の住んだ浙江を中心に、文人茶の文化が高揚を見せるが、彼らは泡茶法（茶葉に湯をかけてだす喫茶法）で喫茶を行いつつも、詩文の上では自らの茶を「煎茶」と呼んでいく。彼らが尊敬してやまない陸游が、「点茶」を「煎茶」と呼んだ故知にならったのである。

さて、表7は全唐詩において使用された「煎」「煮」「烹」「瀹」の数と比率を示したものである。ここで白居易は、唐で最大数の茶詩を著した作家として挙げている。蘇軾（1037～1101）と黄庭堅（1045～1105）は、北宋の茶詩の

代表として挙げたが、南宋の陸游の茶詩の圧倒的な数には及ばない。これを見ると、唐詩では拮抗していた「煎」と「煮」の比率が、白居易では「煎」が圧倒的に多く、陸游も同じであること、蘇軾は「烹」、黄庭堅は「煮」が多いことがわかる。

表8は、同様の調査を「茶」と「茗」について行った結果であるが、その比率の変遷は、表7と奇妙に一致している。これらの表だけから結論づけることは難しいが、唐代において「煎茶」の用語を好んで意識的に使用した白居易の茶詩の発想が、南宋の陸游の茶詩に最も受け継がれているという仮説が成り立つ。

唐の茶詩、特に白居易の茶詩が、蘇軾等を経て、陸游に継承されるという問題は、その変質した部分も含め、茶のイメージの形成という角度から、さらに詳細に調査しなければならない。稿を改めて論ずることとする。

注

1 筆者はいくつかの著述において、中国喫茶文化の展開を概観する試みを行っている。その最新の見解は、「中国喫茶史」（講座 日本茶の湯全史Ⅰ中世）茶の湯文化学会編 思文閣 二〇一三）所収にまとめたところである。

2 この箇所は難解であるが、王褒が知り合いの未亡人のために書いた、その従僕がするべき仕事を列挙した契約書（ただし戯文）である。字に異同があるが、『駢体文鈔』の復元（この部分は「古文苑」と『初学記』に基づく）によった。この意味は難解であるが、「断蘇切脯、筑肉臠芋。膾魚芻鱉、烹茶尽具。已而盖藏、関門塞竇」とあり、種々の宴席の準備での最後に「烹茶」が置かれているので、「尽具」は茶の準備だけでなく全体にかかるように思われる。「尽具」は同義語を重ねた語で、ここでは遺漏無く済ませる意ととれる。したがってこの前後の文意は、宴会の時には、食材を準備し、魚肉の各種の料理をし、あわせて茶を煮、それら全てを成し遂げる、宴会が済んだら、器物をすべて片付けて容器にしまい、戸締まりをしつかりするということになる。短文であるが、茶が宴席の一部であることをうかがわせる。

3 ここでは細かく論じないが、『茶経』七之事は、陸羽が茶文化の正統性を証明するために編纂したものであり、特に東晋時期に喫茶文化が確立していたという主張を行っ

ている。ただし、本来の資料で「菜果」とあるべきところを「茶果」に書き換えている形跡もあり、全てが客観的な資料とはいえない。なお、陸羽と『茶経』全般については、『陸羽『茶経』の研究』（熊倉功夫・程啓坤編著 宮帯出版社 二〇一二）、『現代語でさらりと読む茶の古典 茶経・喫茶養生記・茶録・茶具図贊』（高橋忠彦 淡交社 二〇一三）参照。『茶経』の成立は761年頃と考えられているが、七之事などは後に（775年頃）補われたと考えられている。

4 『広雅』は三国魏の張揖が編んだ『爾雅』の系統の字書である。したがって、このような長文の記事はあり得ず、実際、現行本には見えない。この資料が何に基づくかは不明ということになるが、南北朝時代の資料として用いることは可能であろう。

5 陶弘景の「本草集注序」に見える『桐君採葉録』のことであろう。

6 唐代以前の文学作品には茶が描かれることが少なく、特に詩においては、二三の例しか認められない。これも、茶が文化的に重要な存在とされていなかったことを示す。『茶経』に引く文学作品は、左思の「嬌女詩」、張載の「登成都樓詩」、傅巽の「七誨」、弘君拳の「食檄」、孫楚の「出歌」、茶を題としたのは、杜育の「荈賦」、鮑令暉の「香茗賦」であり、これらではほぼ尽きていると言つてよい。

7 データベース「全唐詩分析系統」（北京大学教誨分析研究中心・北京燕歌行科技有限会社）を用いて検索した。

8 『洛陽伽藍記』に「肅初入国、不食羊肉及酪漿等物、常飯鯽魚羹、渴飲茗汁。京師士子、道肅一飲一斗、号为「漏卮」。経数年已後、肅与高祖殿会、食羊肉酪粥甚多。高祖怪之、謂肅曰「卿中国之味也。羊肉何如魚羹茗飲何如酪漿」肅対曰「羊者是陸産之最、魚者乃水族之長。所好不同、并各称珍。以味言之、甚是優劣。羊比齊、魯大邦、魚比邾、莒小国。唯茗不中与酪作奴」。高祖大笑、因拳酒曰「三三横、兩兩縦、誰能辨之賜金鍾」。御史中尉李彪曰「沽酒老嫗盆注項、屠兒割肉与秤同」。尚書右丞甄琛曰「呉人浮水自云工、妓兒擲繩在虚空」。彭城王勰曰「臣始解此字是習字」。高祖即以金鍾賜彪。朝廷服彪聰明有智、甄琛和之亦速。彭城王謂肅曰「卿不重齊魯大邦、而愛邾莒小国」。肅対曰「郷曲所美、不得不好」。彭城王重謂曰「卿明日顧我、為卿設邾莒之食、亦有酪奴」。因此復号茗飲為酪奴。時給事中劉縞慕肅之風、專習茗飲、彭城王謂縞曰「卿不慕王侯八珍、好蒼頭水厄。海上有逐臭之夫、里内有学擲之婦、以卿言之、即是也」。其彭城王家有呉奴、以此言戲之。自是朝貴宴会、雖設茗飲、皆恥不復食、唯江表殘民遠來降者好之。後肅衍子西豊侯肅正德婦降時、元義欲為之設茗、先問「卿於水厄多少」。正

徳不曉義意、答曰「下官生於水郷、而立身以來、未遭陽侯之難」。元義与拳坐之客皆笑焉」とあり、北魏では一般に茶は「茗飲」と呼ばれており、「漏卮」「酪奴」「水厄」とも呼ばれて、侮辱の対象になっていたことを如実に示している。

9 陸羽は安史の乱を避けて、760年に湖州に赴き、貴顕や文人と交流を深めた。特に、773年に顔真卿が湖州刺史として赴任すると、その庇護の元に類書『韻海鏡源』の編纂に参画した。七之事の資料はその際に収集したとも考えられている。

10 『新唐書・藝文志』は「煎茶水記」に作るが、書名としては、もと「水説」（温庭筠「甫里先生伝」、白氏六帖）「茶」、『新唐書』陸龜蒙伝 もしくは「水経」（葉清臣「述煮茶泉品」、太平広記）³⁹⁹ と呼ばれていたといわれる。

11 白居易の茶詩については、筆者が全作品を訳出した。「唐宋茶詩訳注 6 白居易の茶詩（上）」（『茶の湯文化学』18）、「唐宋茶詩訳注 7 白居易の茶詩（中）」（『茶の湯文化学』19）、「唐宋茶詩訳注 8 白居易の茶詩（下）」（『茶の湯文化学』20）に掲載されているので参照。

12 『敦煌医業文献輯校』（馬繼興等編 江蘇古籍出版社 一九九八）による。

13 嚴密にいえば、陸羽の「三沸」と他の料理書や薬学書で使われる「三沸」は意味がことなる。前者は、沸騰までを三段階に分けたもので、第三沸は沸騰を意味する。後者は、沸騰してから、二、三回ぐらつと沸きたたせることをいう。陸羽は、伝統的な用語を使いながら、独自の意味で定義づけて、嚴密な用語に仕立てたのである。

14 陸羽の崇拜者たる皮日休の「茶中雜詠序」に「然季疵以前稱茗飲者必渾以烹之、与淪蔬而啜者無異也」とあるが、これは陸羽以前の喫茶法が、「淪蔬」すなわち野菜を茹でるような雑なものだと言つており、「淪」が雅なる用法ではなかったことを示す。なお、陸羽の茶詩における「煎」と「煮」の使用状況については、表5参照。「淪茗」は、「与兒孫同舟泛湖至西山旁憩酒家遂詠任氏茅庵而歸」、「伏中官舍極涼戲作」、「歲晚懷故人」、「戲詠山家食品」、「新泉絶句二首 其二」に見える。

15 『茶経』における五種の茶の異名については、『現代語でさらりと読む茶の古典 茶経・喫茶養生記・茶録・茶具図贊』p.17～p.19参照。要点を述べれば、「茶」は古くから存在した「茶」（苦菜の意）が、ツバキ科の茶に限定的に使用されるようになったもの。「檜」（ひさぎ）は、茶と無縁の語で、陸羽が誤解しただけのもの。「設」は、四川の方言で香草を意味したらしい。「茗」は、長江下流域での使用例が目立つが、「茶」の同義語として古くから使用された。『茶経』一之源が引く楊雄「方言」によれば、早

く摘んだものを「茶」、遅く摘んだものを「茗」というとあるが、確実ではない。「筴」はおそらく「設」と同系統の語で、茶の四川方言か。

表5は、データベース『全宋詩分析系統』（北京大学数拠分析研究中心・北京燕歌行科技有限公司）を用いて検索した。陸游は、茶の産地である四川にも赴任しているが、晩年には故郷の山陰会稽（浙江紹興）に住した。会稽山こそは、草茶（高級な葉茶）である日鑄茶の産地であった。また、彼は提拳武夷山冲祐観として、定期的に北苑茶を入手していた。つまり、宋を代表する二大名茶を愛飲していたということになる。彼の作品といわれる「齋居紀事」は草茶を点茶で飲む方法を述べた文章である。北苑団茶は、当然点茶で飲んだものと思われる。